（様式１）

学力向上のための重点プラン【小学校】

新宿区立淀橋第四小学校

■　学校の共通目標

授業作り	重点	○児童の「意欲を高める」「理解を深める」授業を実践する。基礎的・基本的な学力を確実に定着させるとともに、それを活用し主体的・対話的な授業を充実する。	中間評価	○学校評価や学校公開アンケートの活用をはじめ、結果を分析して、主体的・対話的な授業の充実に向けて授業改善に努めている。	最終評価	○学校評価や学校公開アンケートに加え、ＯＪＴ推進や校内研究を通して、授業を参観し合い、主体的・対話的な授業の充実を進めることができた。
環境作り		○一人１台タブレット端末を効果的に活用し、個別最適化された学び・対話的な学び・家庭と連携した学び等の充実を図る。ICT 機器を効果的に活用し、児童の驚きや発見を導き、理解を深める。ユニバーサルデザインの視点から個に応じた学びの充実を図る。		○校内でタブレット端末の活用方法の研修を行うなど、全教職員がタブレット端末を積極的に活用できるようにしている。効果的に活用していくために、情報交流を今後も行っていく必要がある。		○情報交流を行ったことで、タブレット端末の活用方法が浸透した。分散登校ではオンライン学習を進めることができた。今後は全教職員が効果的にタブレット端末を活用していけるように引き続き研修を行う必要がある。

■　学年の取組内容

学年	教科	学習状況の分析（10 月）	課　題（10 月）	改善のための取組（10 月）	最終評価（２月）
1	国語	学音読をする機会を多く設けたため、簡単な文章を正しく読むことができるようになった。 学字形に気を付け、丁寧に書こうとしている児童が多くいる。一方、文章を書く際に、句読点、撥音、拗音などの書き方が違っている児童が見られる。	・句読点、撥音、拗音を正しく使うことができていない児童が多い。視写や作文を通して、文章を書く機会を多く設ける必要がある。 ・新出漢字、及び片仮名の書き順や字形を正しく覚えていない児童が半数近くいる。	・視写する時間を設けたり、週に一度、日記を書く時間を設けたりすることで、文章を書く力を伸ばしていく。 ・反復練習を行う他、小テストを単元ごとに実施することで、新出漢字や片仮名の確実な定着を図るようにする。	・句読点、撥音、拗音が間違って使われている文を正しく書き直して視写をするというワークシートに取り組んできた。また、教師が日記にコメントを書く際、既習の漢字を使っているか、正しい文章になっているかなどを確認した。この積み重ねにより、正しい文章を書くことができる児童が増えた。 ・片仮名の書き方や字形に関しては、片仮名で書く身近なもの見付けを行ったり、似ている片仮名見付けを行ったりし、反復練習をしてきた。８割程度の児童は片仮名の書き方が定着した。
	算数	学繰り上がりや繰り下がりのない一桁の計算はほぼ全員の児童ができる。繰り上がりや繰り下がりの計算も１０のまとまりを作って計算する方法を用いて８割近くの児童が正しく計算できるようになった。	・文章問題から題意を正しく理解し、立式することが困難である児童が３割程度いる。	・文章問題に多く取り組ませ、ポイントとなる「あわせていくつ」「残りはいくつ」といった言葉やキーワードに着目しながら立式をする習慣を身に付けさせる。また、加法や減法の場面を具体物やＩＣＴ機器を用いて視覚的に捉えられるようにする。	・タブレット端末を使いドリルパークの問題に取り組ませてきたことで、繰り上がりや繰り下がりの計算の仕方が定着し、８～９割の児童が正しく計算をすることができている。 ・文章問題に取り組む際、キーワードに着目する習慣がついてきた。また、具体物やＩＣＴ機器を使って視覚的に題意を捉えることもできている。９割程度の児童は、文章題から題意を正しく理解し、立式できるようになった。

学年	教科	学習状況の分析（４月）	課　題（４月）	改善のための取組（４月）	中間評価・追加する取組（10 月）	最終評価（２月）
2	国語	学板書や教科書の試写をする際に、字形に気を付け、丁寧に取り組む児童が多い。しかし、速さばかりに目が向き、丁寧に書くことができない児童もいる。 学文を書くことについては意欲的な児童が多いが、習った字を使わずに文を書いたり、同じ読み方の別な漢字を使ってしまったりする様子が見られる。 学文章を読み、叙述に即して考えたり根拠となる部分を探したりすることについては、語彙力の差が大きく、言葉の意味理解が十分にできず、内容を正しく読み取ることが困難な児童もいる。	・視写の基本である「正しく」「丁寧に」「速く」の３点を指導し、個人の状況に合わせて３つの中で自分に足りないものは何かを考えさせることが課題である。 ・新出漢字を習う際、読み方や書き方のみを注意している児童がいる。そのため、漢字の成り立ちや意味について触れたり、使用場面を考えさせたりする指導が必要である。 ・語彙力の差が大きく、言葉の意味を理解できない児童がいる。個人差を配慮した上でどのような指導をしていくかが課題である。	・板書や教科書の試写に取り組む時間を確保する。そのうえで、３点のうち自己の課題が何かを考えるようにさせ、重点項目を克服できるように取り組ませる。 ・新出漢字を学習する際、成り立ちや意味を指導するとともに、どのような使用場面があるのかを発表させ、合っているかを考える時間を設ける。 ・タブレット端末の使い方に慣れ、家庭でもドリル学習に取り組めるようにして、理解の定着を図る。 ・文章の読み取りの場面だけでなく、普段使っている言葉の意味に着目させ、どのような意味かを説明し合ったり教えたりする。	・課題について考えさせたことにより、それぞれが自らの課題を克服していこうと努力する姿が見られている。成長を認め、励ましながら意欲的に取り組めるようにする。 ・新出漢字の指導の際、成り立ちや意味をおさえたことにより、使用場面を意識して正しく使うことができる児童が増えた。 ・タブレット端末のドリル学習に繰り返し取り組ませたことにより、漢字を正しく書ける児童が増えた。 ・一つの言葉について、他の使用場面を考えさせたり類義語で表現させたりしたことで、言葉の意味への理解が深まった。今後も言葉の理解を深める指導を継続していく。	・「正しく」「丁寧に」「速く」について指導し、取組を続けた結果、ノートや連絡帳、ワークテスト用紙等への書字について改善が見られた。 ・新出漢字の成り立ちについての指導を繰り返し行ったことで、同音の読み方をする漢字の書き間違いが減った。今後も指導を続けていく必要がある。 ・ドリル学習に取り組ませたことで、漢字の定着とともにタブレット端末の使用にも慣れてきている。新宿区学力定着度調査でも、漢字の読みは区の正答率を上回った。 ・漢字の学習場面や文章の読み取りの場面で使用場面や似た言葉について指導を行ったことで、語彙の拡充が見られ、文章中で学習した言葉を使うようになってきた。
	算数	学数や長さ、広さ、かさについての大小関係は、概ね理解できている。 学繰り上がり、繰り下がりのある計算は、概ね理解できている。しかし、指を使って考える児童もおり、正確さや解く速さについては個人差が大きい。 学文章問題を読んで具体的な場面を想像し、量の増減を基に立式をすることについては、理解できている児童が多い。ただし、「どちらがどれだけ」の問いに対しては文章の読み取りが十分でなく、正答を導き出すことができない児童が見られる。	・単元の学習時には理解している様子が見られるが、以前に習った単元の学習内容を忘れてしまっていることがある。定着するように継続的な指導を行うことが課題である。 ・繰り上がり・繰り下がりの計算については、指を使って数えてしまうことで解く速さが遅くなってしまう。さらに、数え間違いにより正確さが低下しているので、正しく計算できる力を身に付ける指導が必要である。 ・聞かれていることは何かを正しく理解できるように、文章問題のあ内容を丁寧に指導していくことが必要である。	・数単元前の学習内容を宿題として出したり、普段の生活の場面で既習事項を生かした発問をしたりする。 ・タブレット端末の使い方に慣れ、家庭でもドリル学習に取り組めるようにして、理解の定着を図る。 ・算数の授業時間内に足し算や引き算の計算に取り組む時間を設け、計算に慣れるようにする。正解数を増やしたりかかる時間を短くしたりできるように繰り返し計算問題に取り組ませる。 ・文章問題を解く際には、分かっていることと聞かれていることを確認するとともに、数量の多寡や増減を考えさせることで、正しく意味を理解できるようにする。	・既習事項について宿題や日常生活で触れることで、学びの定着を図ることができた。課題のある児童に対しては、補充の学習を行い、基礎学力の定着を図っていく。 ・タブレット端末を活用した宿題を出し、繰り返し計算問題に取り組ませることで、正しく計算できる児童が増えた。 ・初めは時間がかかっていたが、だんだんと計算に慣れてきて、単元の振り返りテストでは解ける数や素早さ、正確さの向上が見られた。今後は足し算、引き算の他、掛け算にも取り組ませていく。 ・文章問題の内容を読み、重要な部分に線を引かせたことで、題意を理解して、正しく立式できる児童が増えている。	・宿題や日常生活で既習事項について意図的に触れたことで理解の定着が見られ、単元のまとめのテストでの平均正答率が 80%を超えた。 ・タブレット端末の活用や、学習の始めに毎回マス計算に取り組ませた。特に、マス計算では加法・減法・乗法に取り組ませたことで、次第に間違いの減少や解き終わる時間の短縮が見られた。計算の正確さや速さが向上した。また、新宿区学力定着度調査でも乗法の計算は区の正答率を上回った。 ・文章問題の内容に線や印を付けたことで題意を理解でき、正しく立式できる児童が増え、単元のまとめテストでの平均正答率が 80%を超えた。

3	国語	調「話すこと・聞くこと」において、区及び全国の平均正答率を大きく下回っている。 調「書くこと」では、文章を書くことについて区及び全国の平均正答率を下回っている。 学順序だてて書いたり話したりすることができるようになってきたが、自分の思いや考えを表現することに課題がある。	・「話を聞きとる」ことを苦手とする児童が多い。話の中心や大事なキーワードを選んだり聞き取ったりすることができる指導が必要である。 ・文章を書くことに苦手意識をもっている児童が多い。指定された長さで文章を書けるようにすることが課題である。 ・気持ちを表すキーワードを基にして、そこに必ず理由を付け加えられるように引き続き指導をしていく必要がある。	・話の中心や大事なキーワードを捉えるために、文頭表現や末尾表現などに気を付けさせる。また大事なことを落とさないように聞くために、よい話し方やよい聞き方についての話型や聴型を示し、指導する。 ・文章を書くことへの苦手意識を減らすために、その日あったことを振り返る文章を毎日書かせる宿題を設ける。 ・文章を書く際に、書き方の提携を提示し、正しい書き方を習慣付けさせる指導を行う。 ・家庭学習や授業時間でタブレット端末を使ったドリ宇学習に取り組ませることで、理解の定着を図る。	・相手に伝わりやすくするための話型について指導を行ったことで、自信をもって大きな声で話す児童が増えた。今後、友達の発表についてどう思ったのかを自分の言葉で伝えられるように指導していく。 ・自分の考えを表現する際の定型を随時提示することで、文章を書くことへの苦手意識の軽減につながり、順序よく接続語を意識して書く力が定着してきている。 ・今後もタブレット端末を活用した家庭学習で繰り返し漢字の書き取りや読み取りに取り組ませ、知識の定着を図っていく。	・発表の時間に繰り返し話型を提示したことにより、発言に対して苦手意識をもつ児童が、友達の発言を受けて自分の考えを発する姿が見られるようになってきた。 ・共通教材を用いて書く時のポイントを示し、モデル文を用いて完成形についての見通しをもたせたことで、「はじめ」「中」「終わり」で書くべき内容を理解し、書き進めることができた。 ・家庭学習でドリルパークを効果的に活用することで学習成果が顕著に表れた。新宿区学力定着度調査の結果からも読む力と書く力の向上が明らかとなった。
	算数	調「1000 までの数」では、文章を書くことについて区及び全国の平均正答率を下回っている。 調「長さ・かさ」では、文章を書くことについて区及び全国の平均正答率を下回っている。 学計算問題や九九の習熟には個人差がある。	・10 や 100 を一つのまとまりとして見て、数を相対的に見られるようにする指導が必要である。 ・任意単位を用いて測定することはできているが、かさの差を求めるときに問題文の内容を正確に読み取れるように指導をする必要がある。 ・加法、減法の筆算の仕方や九九を忘れないよう、ベーシックタイムや家庭学習で繰り返し指導する必要がある。	・既習事項が十分に身に付いていないため、毎日の家庭学習で復習に取り組む。 ・文章問題を読むときに、分かっていることと求めることを区別できるよう、下線を引く指導をすることで、正しく立式できるようにする。 ・加法、減法の筆算の仕方や九九などは、始業時に行うチャレンジ問題を活用し、知識の定着を図る。 ・家庭学習や授業時間でタブレット端末を使ったドリル学習に取り組ませることで、理解の定着を図る。	・毎日の宿題作成時には既習事項の復習も取り入れ、理解の定着を図っていく。 ・文章問題では、分かっていることや求めることに線を引くように指導したことで、単元の振り返りのテストでは児童が題意を正しく読み取れるようになり、ケアレスミスの減少にもつながった。 ・毎時間、チャレンジ問題を行うことで素速く正確に計算する力が身に付いてきている。 ・デジタル教科書等ＩＣＴ機器を効果的に活用して視覚的に理解させるようにしている。今後はタブレット端末のドリル学習とプリント学習を併用することで、筆算の書き方やコンパスの正しい使い方の定着を図る指導を継続していく。	・授業と連動した家庭学習により、学習内容の定着が見られるとともに、既習事項を生かして問題を解くようになってきた。 ・問題文に下線を引いたり印を付けたりしたことで問題の場面を理解し、正しい答えを導く児童が増えた。問題文を読み取る力が十分身に付いていない児童もまだいるため、補充的な指導を続けていく。 ・デジタル教科書を効果的に活用して、視覚的にも分かりやすい工夫を行い、指導してきたことで学習の理解が深まり、単元テストの平均得点率は 80%を超えている。 ・新宿区学力定着度調査の結果より「大きい数」「長さ・重さ」の正答率が区及び全国の正答率を上回る結果となった。
4	国語	調全校正答率を上回っているが、第３学年の配当漢字を書くことが身に付いていない。 調「言葉の学習」では、漢字の部首について目標値を上回っているが、国語辞典の使い方の理解が十分ではない。 調２段階構成の作文や中心を明確にして文章を書くことについては目標値を上回っているが、指定された長さで文章を書くことに課題がある。 学第２学年の漢字については、概ね定着している。	・第３学年配当の漢字について、正しく読むことや書くことに課題がある。また、文章に取り入れて書けるような指導が必要である。 ・五十音の順番について理解していない児童がいるため、国語辞典を速く引けるようにする指導が必要である。 ・「書くこと」について、苦手意識が高い。３～４文程度の長さでしか書くことができないので、文章を書くことに慣れるような指導が必要である。 ・繰り返し指導しないと既習の漢字を忘れてしまうので、自分で学習できるような手立てが必要である。	・読むことについては、授業中や家庭学習に音読を取り入れるなどし、言葉に慣れ親しませるようにしていく。また、文章を書く漢字テストを定期的に行い、漢字の意味と使い方を理解できるようにする。 ・国語だけでなく、総合的な学習の時間などの調べ学習でも、国語事典を引く機会を多く取り入れ、定着を図る。 ・「書くこと」については、短い文章で自分の考えや感想を書く活動を設定し、苦手意識を克服させる。 ・家庭学習や授業時間でタブレット端末を使ったドリル学習に取り組ませることで、理解の定着を図る。	・漢字ドリルとタブレット端末を併用し、読み書きの練習に繰り返し取り組ませたことで、正しく漢字を書く力が定着してきた。 ・様々な場面で国語辞典を活用させたことで児童がすすんで分からない語句を調べる習慣が身に付いてきた。 ・説明文から筆者が伝えたいキーワードを探し、各段落の内容把握をさせてから、200 字程度の要約をする指導を行い、文章を書く力を身に付けさせていく。 ・タブレット端末を活用したドリル学習に加え、オクリンクやムーブノートを活用して学習のまとめを行うことで指導を深められている。今後も指導を継続していく。	・文章を書く漢字テストを定期的に行うことや、国語辞典を活用した指導を行ったことで、文章中の正しい語句の使い方や語句の意味の理解に繋がり、定着を図ることができた。 ・教材文から大事な言葉や文を見付け、各段落の内容把握をさせてから書かせたことで、苦手意識なく要約や書く活動に取り組む児童が増えた。 ・内容把握をする取組を１年間通して指導してきたことで、新宿区学力定着度調査の結果、叙述を基に内容を読みとる力が全国の正答率を大きく上回る結果に繋がった。 ・デジタル教科書を積極的に活用した授業や、タブレット端末を活用したドリル学習で復習を行ったことにより、意欲的に取り組む様子や学習の理解に繋がった。
	算数	調「わり算」の２桁÷１桁＝１桁（余りあり）の計算については、目標値を下回っている。また、余りの処理に気を付けて答えを求めることについても目標値を下回っている。 調「10000 より大きい数」については目標値を上回っているが、数の相対的な大きさの理解については目標値を下回っている。 学計算について苦手意識をもっている児童が、計算に意欲的に取り組むようになった	・かけ算の習得に課題がある児童が多いため、わり算についても計算を誤ったり、余りを書き忘れたりする児童が多い。正しく計算をできる力を身に付ける指導法が課題である。 ・ある数を、単位に着目してそのいくつ文と見る方法や、数の仕組みについて理解できるような指導が必要である。	・算数の時間のはじめに、四則計算の小テストに毎回取り組ませることで、かけ算・わり算を習得させる。 ・適切な単位を使えるようにさせるために、身近なものの重さに置き換えて覚えさせるなどの具体物を活用した指導を行う。 ・家庭学習や授業時間でタブレット端末を使ったドリル学習に取り組ませることで、理解の定着を図る。	・毎時間、小テストに取り組んでいることで、四則計算に慣れ、余りの処理に気を付けられるようになってきた。東京ベーシック・ドリルの分析を基に、個に応じて問題数を減らし、確実に問題を解けるよう支援したことで、意欲の向上につながっている。 ・デジタル教科書を活用し、視覚的に問題を捉えやすくしたことで学習内容の理解につながり、単元の振り返りのテストでは適切な単位を使えるようになってきている。 ・タブレット端末を中心に復習プリントを併用しながら、反復練習を重ねることで、学習の定着を図っていく。	・毎時間の四則計算の小テストの取組によって、分数や小数のかけ算とわり算の単元では計算ミスが少なくなってきた。正しく計算できる力が高まった。 ・大きな数や小数、面積などでは、数量的感覚を働かせ、大きさの見当や見通しをもって問題に取り組むことにはまだ課題がある。具体物だけでなく、学校生活の中でも関連させた指導を行い、学習の定着を図っていく。 ・新宿区学力定着度調査では、「わり算」「小数」「計算のきまり」など「数と計算」の領域において区の正答率を上回り、毎時間の小テストや繰り返し復習することでよい結果に結び付いた。

5	国語	調「話合いの内容を聞き取る」において、全国正答率を下回っている。 調「漢字を読む」「漢字を書く」において、全国正答率を少し下回っている。 学「始め・中・終わり」を意識して文章を書くことは概ね定着している。要約文を書くことは、まだ十分に身に付いていない状況である。	・話を聞く際に、要点をおさえて聞き取ることが苦手である。大事な言葉を聞き取る力を身に付けられる指導法が求められる。 ・繰り返し練習をすると定着してくるが、時間が経つと既習事項を忘れてしまう。繰り返し練習する時間の設定が必要である。 ・説明文において、中心となる言葉や文を見付けられる力を身に付ける指導が必要である。	・授業で短い内容を聞き取ってメモをする時間を継続的に設定する。 ・家庭学習に音読を入れることで漢字を読むことに慣れさせる。また、授業の中で新出漢字や間違えやすい漢字について触れる機会を増やし、漢字の読み書きの力を定着させる。 ・説明文において、中心となる言葉や文を見付ける活動を設定し、その根拠まで考えを交流させることで見付ける力を身に付けていく。 ・家庭学習を中心に授業時間でもタブレット端末を使ったドリル学習に取り組ませることで、理解の定着を図る。	・話を聞くことを意識させる指導を継続したことで、学習面に加えて生活面でも話を聞く力が身に付いてきている。 ・音読や漢字を書く家庭学習を継続的に行ったことで、単元の振り返りテストでは教科書の文章を読む力や漢字を書く力が身に付いてきている。 ・説明文への苦手意識が強い児童が多い。児童が主体的に文章を読もうとする発問の仕方を考えていく。	・話を聞くことを意識させる指導を継続してきたことで、話を正確に聞き取る力は身に付いてきている。しかし、新宿区学力定着度調査の結果では、「話し手の工夫を捉える」問題で目標値に届いておらず、「話し方の工夫を意識させて聞く」といった指導が必要である。 ・漢字練習を継続的に家庭学習で取り組ませたことで、新宿区学力定着度調査では読みは95%以上の正答率を出し、書きでも目標値を超えられる問題が増えてきた。 ・説明文の内容を生活体験と結び付けることで、関心をもって学習に取り組む児童が増えた。さらに児童が主体的に学習に取り組める指導の工夫が必要である。
	算数	調「億と兆・がい数の表し方」において、全国正答率を下回っている。 調「小数」「垂直・平行と四角形」において、全国正答率を少し下回っている。 学個人差が大きい。掛け算九九、わり算など習得が十分ではない児童もいる。	・「〇の位までの概数」「上から〇桁の概数」という言葉の意味を理解させる必要がある。 ・小数は、掛け算・わり算において、正しく小数点を付けられるようにする指導が求められる。 ・苦手意識をもっている児童は、既習事項を繰り返し復習する必要がある。	・大きい数を扱う時に、位を確認したり概数での表し方を確認したりする場を設ける。 ・小数点の位置や単位など見直すときのポイントを示す。 ・掛け算九九哉わり算など習得が十分ではない学習内容がある児童は個別に家庭学習に加えるなど丁寧に対応し、基礎学力を定着させる。 ・家庭学習を中心に授業時間でもタブレット端末を使ったドリル学習に取り組ませることで、理解の定着を図る。	・大きい数だけではなく、小数の位も定着に課題があるので、数を扱う際は位や大きさを意識させていく。 ・問題やテストを解く前に見直すポイントを板書することで、東京ベーシック・ドリルでは単位を忘れないなどケアレスミスが減ってきている。 ・タブレット端末で個別に課題を出すことができるので、一括に家庭学習に取り組ませるのではなく、児童の理解度に応じて必要な課題を出すことで理解の定着を図っていく。	・位の指導を継続したことで、家庭学習で取り組むプリントでは小数の計算や概数を求める問題への正答率が上がってきた。 ・小数を中心とした計算問題を継続的に家庭学習で取り組ませたことで、新宿区学力定着度調査では目標値を5ポイント以上、「数と計算」の領域では区の正答率を1.7ポイント上回った。 ・タブレット端末を積極的に活用したドリル学習に加えプリント学習も併用することで、計算力の定着だけではなく、分度器やコンパスを正しく使う力の定着も引き続き図っていく。
6	国語	調「文章を書くこと」において、目標値、全国の平均正答率を大きく下回っている。 学目的や意図に応じて構成を考え、文章を書くことを苦手とする児童が多い。また、段落の意味やまとまりを意識して書くことが十分身に付いていない。 学第５学年の漢字については、概ね定着している。	・始め・中・終わりの構成を考えながら書くことや、読み手に伝わるよう効果を考えて書けるようにする指導が必要である。 ・漢字がもつ意味を理解していないため、同音異義の漢字と間違える児童が多い。意味を正しく理解させていく必要がある。	・国語に限らず、各教科でも学習のまとめを書いたり、自分の考えを文章で表現したりする時間を設ける。 ・文章を書く際は、短冊や構成メモを活用するとともに、工夫した表現や自分の気持ちを書けている部分に線を引くなどの価値付ける指導を行う。 ・漢字のミニテストを継続して行い、新出漢字に加えて既習の漢字を書く機会を設ける。 ・家庭学習を中心に授業時間でもタブレット端末を使ったドリル学習に取り組ませることで、理解の定着を図る。	・単元ごとに、筆者の考えや物語に対する自分の考えを書くことで、自分と結び付けて文章を読んだり、考えたことを書いたりできるようになってきた。 ・自分の考えを述べることができる児童が限定されている。意図指名を行ったり、ムーブノートを活用したりすることで、全員が自分の考えをもち、発信したり、交流したりできるようにしていく。 ・タブレット端末を主に活用し、繰り返し漢字のドリル学習に取り組んだ。今後はプリント等も併用し、多様な問題に取り組めるようにして定着を図っていく。	・筆者の考えに対する自分の考えをまとめる学習を積み重ねたことで、文章を書く力が身に付いてきた。卒業文集では、始め・中・終わりの構成を考えながら読み手に伝わるよう自分の思いを表現し、全員が自分の力で書き上げることができた。新宿区学力定着度調査でも「文章を書くこと」において、全国の正答率を上回ることができた。 ・タブレット端末でムーブノートを活用することで、全員が自分の意見をもって発信したり、交流したりすることができた。 ・新出漢字の指導では、ドリルパークや音読に繰り返し取り組むことで、児童の８割が漢字テストの点数を伸ばすことができた。
	算数	調「分数と小数」において、区及び全国の平均正答率を下回っている。 調「平均」において、区の平均正答率を下回っている。 学小数の計算、分数の計算に課題が見られる。また、分数の計算では、通分と約分に課題があり、数の性質の理解が不十分である。	・算数的活動を通して、数の見方や感覚、計算の意味の理解などを高める必要がある。 ・小数のかけ算やわり算、分数の約分や通分などにおいて、計算の仕方が定着しておらず、正しく計算する力を身に付けさせる必要がある。	・文章問題では数直線を活用するよさを指導し、正しく立式する力を高めていく。 ・家庭学習に既習内容を取り入れ、復習の機会を設けることで、小数や分数の四則計算の定着を図る。 ・家庭学習を中心に授業時間でもタブレット端末を使ったドリル学習に取り組ませることで、理解の定着を図る。	・文章を読むことに抵抗がある児童が多いため、図や数直線で表しながら文章を読むことを習慣化させた。今後も指導を継続し、自信につなげていく。 ・新しい単元に入る際に、学習内容に関連する既習事項に触れることで、問題解決の場面で活用できるようにする。 ・タブレット端末を中心にプリントを併用することで、確実に学習内容を定着できるようにしていく。	・文章問題では、問題文に線を引く、図や数直線で表すなどの指導を継続して取り組んだことで、正しく立式できるようになってきた。しかし、単元が終わると立式の仕方を忘れてしまう児童も見られるため、継続して指導していく必要がある。 ・新宿区学力定着度調査では、分数のかけ算・わり算の問題で目標値を上回り、区及び全国の正答率とほぼ同じ結果になった。 ・小数や分数の四則計算においては、特に分数の計算にまだ課題が見られるので、６年生のまとめの学習で改めて復習を行っている。確実に学習内容を定着できるよう、引き続き授業のはじめの５分間に分数の四則計算に取り組む時間を設けていく。

音楽	学音楽が好き、もっともっとたのしみたいと考える児童が多い。 学楽譜や器楽の奏法で苦手意識を感じる児童もいる	・いろいろな楽曲を楽しむために、楽器の基本的な奏法を身に付けることが課題である。 ・個人でもグループでも臆せずに学びを楽しめることが課題である。	・発音や呼吸の仕方に気を付けて自然で無理のない歌い方で友達と協働して声を合わせて歌ったり、リズムを合わせて手拍子を打ったり、いろいろな楽器で演奏したりする。 ・楽曲の特徴やよさを味わって聴く学習に取り組む。	・声が少しずつ出てきているが、まだ地声や喉に力を入れた歌い方の児童が見受けられる。呼吸を深くすることで無理のない発声を自らで判断できるように指導していく。合奏ではタブレット端末を活用し、拍にのってリズムのよい音楽をつくれるように指導していく。	・どの学年も楽しく表現できるようになり、歌唱では響きある歌声で歌えるようになってきた。また、器楽では臆せず様々な楽器に意欲的に挑戦し、演奏することができた。 ・音楽づくりでは、リズムや楽器を重ねて表現できるようになった。
図工	学豊かな発想をする児童が多いが、なかなかイメージが浮かばない児童がいる。 学イメージをもつことはできるが、どのように表したらよいか分からない児童がいる。	・自分の様々な体験を作品づくりに生かすことができるような指導が求められる。 ・はさみやのこぎりなどの切る道具や絵の具やクレヨン等の描画の道具を、自分の思い通りに使えない児童がいる。様々な道具を使い慣れるような指導が求められる。	・表現の幅を広げるために様々な作例を、ＩＣＴ機器を活用して示し、自由な発想ができるようにする。 ・既習の道具の使い方を授業の初めに使い方の確認をしたり思い出したりするための時間を設け、繰り返し取り組むことで操作がスムーズにできるようにする。	・作例を提示するだけではなくＩＣＴ機器を活用し、作る過程を提示した。作っている過程から発想する児童もいた。 ・初めて使う道具を使用するときは、少人数ずつ集めて動作を一つ一つ確認しながら教えた。自信をもって道具を使える児童が増えた。	・作り方や作例を見せる時に ICT 機器を通してホワイトボードに大きく見せたり、実物を通して美しさを見せたりしたことで、児童のイメージを膨らませる助けとなった。また、頭の中だけで考えるのではなく、手を動かすことが大事なことも勧めていきたい。 ・用具の使い方を掲示することにより、使い方を確認できる児童が増えた。また、それを見ながら、何度も練習したことにより自信をもって作品作りに臨める児童が増えた。
特支					

調…新宿区学力定着度調査の結果から見える学習状況　　学…授業での様子や提出物、作品、ワークテスト等から見える学習の状況　　※分量は 2 ページ以上となってもよい。